



突出した大都市バンコクと広大な農村地帯が併存するタイ国において、都市-農村二分法が、依然、有効な分析手段であることは大方の意見が一致するところであろう。とほいうものの、この単純な二分法では把握できない地区も当然、存在する。私が現在、滞在している町コーラートも、その一つである。テーサバーンの人口（約 20 万人、1990 年）を基準にするならば、コーラートはバンコク、ノンタブリーに続く第三の都市である。この町は、好奇心を満面の笑顔に浮かべて、外国人を無償の愛で迎えてくれるという田舎では決してない。かといって、外国人を外者としてほうっておいてくれる程の都会でもない。さらに「東北タイへの玄関口」たるコーラートは、中部タイでも東北タイでもない独特の表情をみせてくれる町でもある。「微笑の国」の住民とはとうてい思えないこの町の人々の無愛想さ。これとタイ人が何より尊重するという「サバァイ」な生き方は、どこで接点を持っているのだろう。断定はできないが、アユタヤ時代からの軍事的戦略拠点としての歴史が、コーラートを取っ付きにくい町にしているのかも知れない。

ところで、コーラートはいろいろな可能性を秘めた町である。アランヤプラテートでカンボジアとの国境が開かれて商取引が始まり、また将来メコン川にかかる橋が、東北タイとラオスとの関係を一層、密にするであろうことは間違いない。インドシナ市場とのつながりばかりでなく、東部臨海地区の開発が進むにつれて、東北タイの南側に位置する 7 県と、東部タイの北側の 2 県を合わせた計 9 県を一つの経済圏として考え、その発展を考えようという発想もでてきている。コーラートは、これまでの単なる一地方都市ではなく、インド

コーラートの町

上 田 曜 子*

シナ貿易の中心点となり得る有力な候補地の一つなのである。コーラートにとって強力なライバルはコーンケンであろうが、果たしてコーラートの人間は、どれ程の自覚をもって、この現実に対処しているだろうか。私が調査対象としている地元の企業家の中で意識の高い人の視野には、ラオスは有力な市場としてすでに射程内にある。しかし、コーンケンのみならず、バンコクの企業家にせよ、外国企業にせよ、インドシナ市場への進出には、虎視眈眈の姿勢で臨んでいることを忘れてはならない。

経済が成長すると、それは街を行き交う人々の顔の表情までもを変えてしまうものである。私が最初にバンコクを訪れたのは 1982 年のことであった。その 5 年後に、再びバンコクに入った時に、人々がなんとも自信に満ちた面持ちで街を闊歩する姿を、まぶしいばかりの気持ちで眺めたことを、私は今でも忘れられないでいる。バンコクの住民の中には、今や、自分達の町がタイを支える一大中心地であることに誇りと自覚を持ち、Bangkokianとしての価値観に導かれて行動する階層が育ってきているように思われる。一方、現在のコーラートの人々は、自分達の町に無限の可能性が存在することを十二分に認識するに到っていないようである。彼らの自尊心の欠如した行動に接するたびに、私は残念でならない。果たして、5 年後あるいは 10 年後に、私が再びこの町を訪れたなら、私がかつてバンコクで味わった感激を、この町の人達は私にプレゼントしてくれるだろうか。こんな半ば意地悪な気持ちと、そして半ば期待の入り混じった気持ちで、私は一年間のコーラート滞在の振り返し点を迎えようとしている。

(京都大学東南アジア研究センター助手)

* Yoko Ueda, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University